

ローティのネオプラグマティズム思想の形成過程の再検討 — 古典的プラグマティズム、ハイデガーとの関係を中心に —

松本 祐士[†]

Reexamination about formation process of Rorty's Neopragmatism — Focusing on its relationship with classical pragmatism and Heidegger —

Yushi Matsumoto

1. 序論

1.1 研究の背景

プラグマティズム思想は、アメリカ発の、人間の生における環境への適応、知的探求の行為等に焦点を当てた実用主義として展開していたが、1930年代にウィーン学団による論理実証主義がアメリカに移ると、影響力は衰退した。しかし、プラグマティズムの伝統はアメリカ哲学界において続いており、論理実証主義や分析哲学が衰退すると、プラグマティズムに再度光があたり、ネオプラグマティズム思想が発展することになる。リチャード・ローティ（1931～2007）は、後期プラグマティズムの本拠地であったシカゴ大学哲学科を出た哲学史の研究者として古代ギリシャから分析哲学まで幅広く西洋哲学を研究すると共に、分析哲学の影響も受けながら、言語に焦点を当てて、ポストモダン的なネオプラグマティズム思想を展開した。20世紀後期、ローティは、多様な出自や文化が混在するアメリカ社会の底流に流れており、新たな世代へ影響を与えていたプラグマティズム思想を、政治や文化等の領域にまで考察を広げる一方、ニーチェやハイデガー等のヨーロッパ哲学との関係も整理しながら、新たな解釈で捉え直した。これは国際社会においてアメリカの影響力が増大し、超大国化していく時代と合致し、そのアメリカでネオプラグマティズム思想の形成を牽引して、政治学、文学、社会学等の分野にまで多大な影響を与えた。ローティが展開した思想は、20世紀の哲学、思想にとっても、一つの意義深い契機であった。

1.2 研究の課題と狙い

本論文は、ネオプラグマティズムが様々な地域、学問領域へ影響力を持つにもかかわらず、その思想の検討が十分でないことを課題として試みるものである。特にその形成契機と発展を担ったローティの思想について、哲学的な

文脈で再検討して、その思想形成の過程、その意義と課題、今後の展望を浮き彫りにすることを狙うものである。

尚、ローティは、自身の哲学的アプローチについて、「私のような平凡なシンクレティスト（融合主義者）の役割は、独創的精神が生み出したものを地平融合によってつなぎ合わせる物語を作り出すことである」[1]と記した。即ち、古代から近代の哲学でよく見られる「唯一の真理」の探究ではなく、多元主義的な立場に立った上で新たな解釈を生み出し続けることを目指したのであり、様々な思想との関係や歴史的な観点でアプローチしたとするのである。

1.3 研究の意義と先行研究

ネオプラグマティズムの形成背景、諸思想との関係や、その課題については哲学及び歴史学における意義深い研究対象であるが、未だ形成から100年も経ていないことから考察は不十分なままであり、整理及び再検討の余地が残されている。特にローティが残した多くの業績は様々な分野にわたり、「錯綜したエッセイ」、「複雑な論理構成」とも評されがちな文章展開が行われる為、その思想の把握や評価は未整理の部分もあり、ローティ思想の展開について改めて整理し、課題と展望を考察することの意義は大きい。

先行研究として、ローティ自身の多くの論文や書物、大賀祐樹氏の『伝統的なプラグマティズムとローティのネオ・プラグマティズム』と『希望の思想 プラグマティズム入門』、富田恭彦氏の『ローティー連帯と自己超克の思想』、魚津郁夫氏の『プラグマティズムの思想』、ロバート・ブランダム氏の『プラグマティズムはどこから来て、どこに行くのか』といった研究を参考にした。また、ローティによる個別の哲学者との関係については、Charles B. Guignonによる『On Saving Heidegger from Rorty』といった論文も参考にしながら、新たな考察をした。

1.4 論文の構成と概要

[†]2023年度修了（人文学プログラム）

まず、ネオプラグマティズムの出自に関連する19世紀後半から20世紀の西洋哲学の潮流を概観した上で、ローティの思想過程を三期に分けてローティの主要な思想テーマを整理した。更に、ローティと主要な西洋哲学、特にプラグマティズム、分析哲学、大陸哲学との関係を追った。特にローティが多大な影響を受けつつ批判を加えたハイデガーや形而上学との関係に注目しながら、ローティが唱えた連帯思想とそこから見えてくるローティ思想の課題を考察し、ネオプラグマティズムの今後の展望を提示する。

2. ローティの思想の軌跡

ローティはアメリカのニューヨーク州ニューヨーク市で生まれ育ち、13歳でプラトンとニーチェの書物に出会ったことで哲学を志向し、15歳でシカゴ大学に入学して哲学研究を深めた。プラグマティズム、特にデューイの思想から影響を受けながら、当時隆盛であった分析哲学の研究を進めたが、分析哲学に対して疑問を抱くようになり、アメリカでは傍流であったハイデガーやデリダなどの大陸哲学の研究を進めて自身なりに思想のつなぎ合わせを行いながら、ポスト構造主義的なアプローチでネオプラグマティズム思想を固めていった。その思想は、哲学界では肯定的な評価と共に、その徹底的な非実在的、反表象主義的立場から相関主義との批判も受けつつも、ローティは活動の対象を徐々に文学と政治思想、社会思想等の分野へと広げていき、様々な学問分野で注目を集め、影響を与えた。

ローティは亡くなる二ヶ月前に『知的自伝』を書き上げており、同著は、ローティの青年時代から終生までの思想展開を追っていく上で特に重要なものである。尚、本論文ではローティの知的興味、研究対象の移行と思想展開について、前期、中期、後期とに分けて整理した。

2.1 前期ローティ

ローティは社会思想や政治闘争、詩や宗教関連の書物や体験が身近な家庭環境に育った。また、父がデューイと親交があり、実際に幼少期にデューイと出会い、またニューヨークの知識人達とも親交を持ちながら育った。そして15歳でシカゴ大学哲学科に入り、ギリシャ哲学や精神史、分析哲学の研究を進め、途中兵役も経験した後、27歳で大学の教職についた。分析哲学の研究を進め、1967年には論文集『言語論的転回』を著わして分析哲学の研究で業績を挙げた一方で、ハイデガー等の大陸哲学やフッサール等の研究も続けた。1970年代になると分析哲学から離れ、47歳になる1978年に『哲学と自然の鏡』（後にマッカーサー賞を受賞）を著わしている。本論文では、この著作の出版までをローティ前期とする。ローティは同著で、カントが定式化した認識の問題は、人間の状況をデカルトが行ったように描くのを止めれば解消されるとし、「正確な表象」という概念は、われわれがしたいことをする際にそれを成功に導いてくれるような信念に対して贈られる単に機械的で空

疎な賛辞にすぎない」[2]と主張し、ローティの徹底的な反実在論の立場が確立されている。尚、ローティはウイトゲンシュタイン、ハイデガー、デューイの三者を20世紀の最も影響力のある哲学者とし、同著でその三者に対して、「特殊な心的過程によって可能となり、表象の一般理論を通して理解可能なものとなる正確な表象といった知識の概念は廃棄される必要がある、という点で意見の一致」[3]があるとしている。前期ローティは、思想、小説、社会運動が生活に密着した家庭に育ち、ギリシャ哲学から始まり、哲学史、地平融合の観点で形而上学や宗教思想、反形而上学や大陸哲学等を幅広く学びながら分析哲学で立場を築きつつあったものの、形而上学や分析哲学の問題に思い悩み、ポスト構造主義的な反実在論の方向に向かった時期であった。

2.2 中期ローティ

ローティは中期になると、ポスト実証主義的分析哲学と、アメリカ発のプラグマティズム、大陸系のハイデガーの「存在の歴史」の関係を整合する物語を構築出来ていないことを自身の課題に据え、本格的にハイデガー、特に前期ハイデガーなどの大陸哲学の思想の解釈整理に入った。ローティはこの頃の研究の目的を「ハイデガーが語った我々はいかにしてプラトンからニーチェに至ったかについての物語と、デューイが行ったリベラルで社会民主的な社会制度に向けてのわれわれの前進に関する新ヘーゲル主義的な説明とを織り合わせること」[4]と後に振り返っている。アメリカの哲学界で活発であったクリプキの様相論や分析哲学と距離を取り、哲学界における歴史研究とメタ哲学的反省への軽視への不安を持ちながら、当時「おまけ」と見なされていた大陸哲学を研究の中心においた。また哲学的な方法よりも、小説や詩の力に価値を見出し、文学科へ籍を移して研究を進めた。そして1989年にローティ自身が人生で最も気に入る本となる『偶然性・アイロニー・連帯』を出版した。本論文ではここまでをローティ中期とする。

中期ローティは、同著で形而上学から徹底的に離れ、歴史主義的で希望を挙げる「リベラル・アイロニズム」の立場を標榜し、自己の創造・私的な自立という私的な分野と、より公正で自由な人間共同体における公的な分野の二つに対して、統合ではなく同等な価値を認めることを主張した。そして、ハイデガーの「被投性」の概念に近いものだが、個人や共同体なども含めたあらゆる事象、存在の偶然性の前提に立ち、リベラル・アイロニストと呼ぶ人々による、人間の連帯を通じたリベラル・ユートピアの可能性を提唱した。そして、人間の連帯は、「探求」によってではなく、「想像力」によって、つまり見知らぬ人々を苦しみに悩む仲間だとみなすことを可能にする想像力によって、達成されるべきなのである。」[5]とした。

中期ローティは、『哲学と自然の鏡』で一定の結論に至った反実在主義、反認識論的立場から、更にハイデガー、

デリダなどの研究を進めて解釈学、ポスト構造主義的立場から、あらゆるものの偶然性を前提とした。哲学だけでなく、文化・文学的な視点に寄りながら、文学、政治、社会までも対象に含めた西洋思想史の新たな物語と視座を提供した。

2.3 後期ローティ

後期ローティは、中期で展開した公的、私的の二つのものを無理やり統合すべきではないという主張を補強しようとする研究を進めた。ローティは、この二つの「間に障壁があるということではなく、多くの場合両者は無関係だ」[6]とし、基礎学的に最終的に発見されるべき「人間本性」のようなものはない、という立場に立ち続けた。『真理と進歩』（1998年）の後、2000年頃以降の最晩年において、『文化政治としての哲学』（2007年）というメタ哲学的論文を記した上で、『知的自伝』（2007年）を完成して遺し、自身の思想を整理した。ローティは後期においても、「絶対的なものは存在するか」という問いの余韻すら残っていない時代が来てほしいと思う」[7]と徹底的に反実在論の立場に立ち、哲学の永続的な役割を、新たな世界、人間に対する表現を示し続ける文化政治の中に見て取った。

後期ローティは、それまで哲学研究から出発して様々な領域まで思想体系を広げた自身の研究を、一定の立場に改めて整理してまとめた上で、「哲学の終焉」が叫ばれる中であって、文化政治としての哲学の永続的な在り方を説いた。

3. ローティの主要な思想と諸哲学への立場

3.1 反基礎づけ主義

ローティは、前期で徹底的な反基礎づけ主義的な立場を確立し、『哲学と自然の鏡』でデカルト以来の心身二元論を念頭に、心が自然を鏡のように映し出し、知識を基礎づけしていくとする基礎づけ主義の哲学を徹底的に批判した。また19世紀後半の哲学の言語論的展開以後の哲学の多くも、心から独立した世界の忠実な像を与えるという知識を捨てていない点で、デカルト以来の近代認識論と本質的に変わらないとする。更には実在と現象、本質と偶有性、絶対と相対といった区別そのものを不必要として退け、長年相対主義と非難された。ローティはそういった批判に対し、「相対主義を超えるということは、「実在」であれ「理性」であれ「真理」であれ、なんらかの絶対的なものを求めることであり、そうした絶対的なものを求めること自体が、「いまひとつの人間的な必要性」にすぎない。」[8]とした。

3.2 「リベラル・アイロニスト」と連帯

ローティは基礎づけを徹底的に排除した上で、人間が社会的に生活していく上での方向性について、「リベラル・アイロニズム」という思想に至る。ローティは「自己の

「最も深層の」レベルには人間の連帯感などというものには存在しないのであり、こうした連帯感とは人間が社会化されることで生じる「たんなる」人工物にすぎない」[9]と考えるニーチェのような懐疑主義者と、神学と形而上学から自由になることを容易にし、真理ではなく自由を思考や社会進歩の目標とすることを可能にした歴史主義を区別し、歴史主義を好んだ。その上で、自己の創造と私的な自立に向けられた欲求にとらわれている歴史主義者としてハイデガーやフーコー、より公正で自由な人間共同体への欲求にとらわれている歴史主義者としてデューイ、ハーバーマスを区別し、選択ではなく、彼らに同等の重要性を認めて、それぞれを異なった目的の為に用いるべきとした。ローティは「単一のビジョンへの包含を可能にする哲学、あるいは他の理論的な学問など、全く存在しない。・・・自己創造と正義とを統合する方策は存在しない。」[10]としている。

また、ローティは「自分にとって最も重要な信念や欲求の偶然性に直面する類の人物一つつまりそうした重要な信念や欲求は、時間と偶然の範囲を超えた何ものかに関連しているのだ、という考えを棄て去るほどに歴史主義的で唯名論的な人—」[11]をアイロニストと称する。アイロニストの三つの条件を、「第一に自分がいま現在使っている終極の語彙を徹底的に疑い、たえず疑問に思っている。・・・第二に、自分が現在使っている語彙で表された論議は、こうした疑念を裏打ちしたり解消したりすることができないとわかっている。第三に、自らの状況について哲学的に思考するかぎり、自分の語彙の方が他の語彙よりも実在に近いと考えてはいない。」[12]とした。つまり、現在自身が知っている、または考えているような語彙や表現が終極的なゴールではなく、常に新たな語彙や表現を志向しつつ、自身の語彙や表現が実在に近いかどうかを気にしない人間となる。また、高みに至ろうとする形而上学者の試みを省みて、アイロニーの正典とは「形而上学者の試み自体の複数性の基底にある統一を見抜こうとする一連の試みであり、・・・没歴史的な知を信じ、且つ愛する哲学的、形而上学的な衝動、つまり理論化の衝動を十分に理解し、その衝動から完全に自由になる」[13]ことが重要とした。そして基礎づけ得ない欲求の一つとして人が受ける苦しみは減少してゆく、人間存在が人間存在を辱めることをやめられるかもしれない、という希望を挙げる者をリベラル・アイロニストと呼んだ。

尚、ローティは「リベラル」を、政治哲学者のジュディス・シュクラークが提唱する、残酷さこそが私たちがなしうる最悪のことだと考える立場、という意味で使う。そして、リベラルな形而上学者は、優しいものでありたいという私たちの願いがある根拠によって支えられるものであって欲しいと思うのに対して、リベラルなアイロニストは、苦しみを気遣う「理由・理性を発見することではなく、苦しみが生じるときに確実にそれに気づくようにすること」[14]が重要だと考える人である、とローティは記した。

3.3 文化政治と哲学について

ローティは、歴史的な偶然のもとにある人間は当初互いに自文化の基準をもちいて判断せざるを得ないが、表現や会話を重ねることによって、それらの信念や基準が変容し、それぞれの文化の「連帯」が生まれていくとした。ローティにとって、真理とは普遍的で必然的なものではなく、あらゆる言論活動ではあるがまさに表現させる文化が重要である。そこでは哲学は、もはや文化を相互に比較研究する学問、すなわち文化批評のようなものになり、文学や芸術、科学と区別できないようなものになるとした。従って、人知を超えた実在との接触により真理を得るという特権的な活動ではなく、哲学もこうした暫定的な活動の一つであるとした。そして哲学者とは、語り方を変え、更に有り様を変えることを可能とする革新的な記述「メタファー」を編み出した者であり、哲学は、学問として閉塞せず、自然科学、芸術、文学、宗教、政治などの領域との連関の中で、人間や世界に関して新たな語彙や物語の提言を行う「文化政治」としての役割を取り戻すべきであると主張した。

3.4 形而上学に対して

ローティは当初形而上学から哲学に興味を持ったが、博士号取得の頃迄に形而上学に対する自らの疑念を確立した。そして中期ローティは、『偶然性・アイロニー・連帯』で、ハイデガーを意識しながら、形而上学者について「偉大な形而上学者の作品は、丸ごと全体を見抜く古典的な試みである。……形而上学者は現れの複数性を超えようと試みる。高みから見れば予期せざる統一が明瞭になるだろうと期待するのである。」[15]とした。従って、ローティにとって、このように単一のビジョンを求める試みは排除される。

然し、一方でローティは後期ハイデガーに対し、ハイデガーが前期に自身が脱しようとした願望と「非常によく似た考えに逆戻りした。」[16]とする。そして「ついには彼が「形而上学」と呼んだものの代替物として《思索》を発明せざるをえなくなった」[17]として、後期ハイデガーを批判するに至っている。

3.5 プラグマティズムに対して

プラグマティズムとローティの関係は、大賀『伝統的なプラグマティズムとローティのネオ・プラグマティズム』、『希望の思想 プラグマティズム入門』で考察されている。尚、ローティは「プラグマティズムの核心をなすのは、真理の対応説と、真なる信念は実在の正確な表象であるという考えを受け入れるのを、拒否することである。」[18]と定義しているが、大賀は、プラグマティズムは「元来、ある一つの特定の主義主張を押し通すことではなく、むしろ「～主義者」であることを辞めること」[19]と定義している。

プラグマティズムの始まりは、1830年代にトクヴィルが

合衆国民に共通して存在する哲学の方法として認識したのに遡るが、パース、ジェイムズ、デューイらが、カントやヘーゲルの基本概念を受け継ぎ、ロックの経験主義を発展させて、構築したのが古典的プラグマティズムである。20世紀になると、古典的プラグマティズムは論理実証主義の勢いもあって、一時代前のものとなっていたが、20世紀中頃に、ローティがパースやジェイムズ、デューイらの思想を丹念にたどり直して再評価をして、「ネオプラグマティズム」の思想に発展させた。ローティは、デューイが可謬主義的な真理観を受け継ぎつつ同時代の論理実証主義には同調しないで、詩と哲学のつながりを重視した点などから、古典的プラグマティズムの前述の3人の中でもデューイを最も評価した。

3.6 分析哲学に対して

前期ローティは、形而上学からより建設的な哲学方法を求めて分析哲学の研究に入ったが、1960年代にプリンストン大学の教職に就くと、当時哲学界を席卷していた分析哲学に比重を置いて研究に取り組んだ。分析哲学を哲学史の観点で示す象徴的な「言語論的展開」という言葉を広めた論文集『言語論的展開』は、ローティの編集であり、この分野でもローティは深い研究成果を出した。然し、中期ローティは「哲学の言語論的方法」という考え自体が見当違いであったと思い至り、更には「哲学的方法」という考えそのものが、哲学をカントが言う「学の確かな道」に置こうとする繰り返し行われた心得違いの副産物だとみなすようになった。そして後期ウイトゲンシュタインの『哲学探究』は、こういった泥沼から抜け出すという意味でも、完全に成功していると評価するようになった。

また1970年代になるとアメリカ哲学界では、後期ウイトゲンシュタインが研究の対象から外れ、無視されるようになっていったが、ローティ自身はこの様子を見て、分析哲学「界」を、自己防衛を目的とする反動集団とみなすようになったと言っている。こうした中でローティは、分析哲学から離れていき、また当時カントへ帰ろうという誘惑に抵抗していたポスト・ヘーゲルの大陸哲学者達のことを本格的に研究し始めた。

3.7 大陸哲学とハイデガーに対して

大賀は、プラトンから近代哲学に至る思想に対する批判を加えたニーチェを出発点とし、ハイデガーやデリダ等が影響を与えた大陸哲学は、「理性」や「合理的思考」に対して批判的であり、自然科学に対しても懐疑的である。……論理的で明晰な文章よりも、両義的で詩的な表現が多用される。」[20]と論じている。このような大陸哲学は、論理性や検証可能性を求める分析哲学とかみ合わず、英米圏では、20世紀中頃においては分析哲学の勢いの中で「哲学」として扱われない状況であった。このように分析哲学が盛んな英米圏の中において、本格的に大陸哲学に光を当て、プラグマティズムとの関係も含めて精力的に

研究を深めたのが中期以降のローティである。尚、その当時のアメリカにおける哲学界の状況をローティ自身、「一九八〇年代のはじめまで、私はいわゆる「大陸」哲学をさらに熟知しようとベストを尽くすとともに、転職先を探した。・・・アメリカの一流の研究大学のたいていの哲学科は、「大陸哲学」を「おまけ」と見なし、学部生の低級な趣味に迎合するためにだけ、カリキュラムに組み込んでいた。」[21]と記している。

このような状況の中で、大陸哲学を精力的に研究し、再度プラグマティズムに光を当てたローティの貢献は殊更大きい。この後に影響力が弱まっていく分析哲学の結末と後期ウイトゲンシュタインの思想からカントへ還ろうとした多くの哲学者とは違って、いち早く大陸哲学に光を当てて研究を深め、プラグマティズムを整理し直したのである。

前期ローティは『哲学と自然の鏡』において、デューイ、ウイトゲンシュタイン、ハイデガーを、20世紀に最も影響力をもった哲学者の三人に挙げた。ローティは、後期ウイトゲンシュタインが自ら分析哲学のある種の結末を自身で導き出した点を高く評価する。ローティは中期から後期にかけてプラグマティズムと大陸哲学の関係に着目して、デューイとハイデガーの関係について研究を深めており、ローティの思想形成には、特にハイデガーとデューイが大きな影響力を持ったと言える。実際、中期ローティはハイデガー研究を深めており、その集大成である『偶然性・アイロニー・連帯』は「あらゆる認知は言語的な出来事であるというセラーズの説と、人間の思想の歴史はわれわれが自分を描く際に用いる言葉が次々と変化していったということであるというヘーゲルやハイデガーの主張を、一つにまとめ」[22]ることを狙ったものであった。

このようにハイデガーの思想がローティに対して多大な影響を与えた訳だが、ローティによるハイデガーの評価は肯定と否定が交錯しており、特に後期ハイデガーに対しては強い批判を展開している。そして結果的にローティはデューイを最も高く評価している。「私が誰よりも敬服し、自分がその弟子だと思いたい哲学者は、ジョン・デューイである。」[23]とも述べたので、ネオプラグマティズムはポスト・デューイ主義的プラグマティズムとも呼ばれた。このようにローティの思想を追うと、前期においてはギリシャ哲学や近代哲学、分析哲学の研究を深めたが、中期に入ると大陸哲学に対してアメリカから焦点を当ててハイデガー等を研究し、参考にした上で、古典的プラグマティズムを再評価して、後期になると、後期ハイデガーを否定しながらポスト・デューイ主義的なネオプラグマティズムに基づく人間の連帯の在り方や文化政治についての考えを形成した、と整理できよう。然し、ローティが提唱した人間の連帯、想像力といった概念について、ローティによる後期ハイデガーに対する批判内容を紐解いていくと、ローティの思想形成の認識、哲学史上における位置づけについて違った視点が見えてくる。ローティによるハイデガー批判については、ローティ中期の頃にCharles B. Guignonが論文

『On Saving Heidegger from Rorty』で論じており、またローティ自身も中期の終わりの頃に、あまりにも共感を欠いたものであったと述懐する箇所もあるが、ローティの思想形成や哲学史上の位置づけの観点から、十分に検証されていない。

4. ローティの思想の課題

4.1 想像力の源泉

ローティが『偶然性・アイロニー・連帯』で提唱した、「リベラル・アイロニスト」、「残酷さ」、「想像力」、「人間の連帯」といったテーマは、様々な西洋哲学・思想を研究した末に行き着いたローティの思想体系の核心的な部分である。ローティは、「基礎づけえない欲求の一つとして、人が受ける苦しみは減少していくであろうという、そして人間存在が他の人間存在を辱めることをやめるかもしれないという、自らの希望を挙げる者」[24]がリベラル・アイロニストであるとした。そして哲学者が発明した「人間性そのもの」との同一化によるものではなく、リベラル・アイロニストが自己懐疑的に新たなメタファーを獲得する過程で、「われわれが信じ欲していることを、あなたは信じ欲しますか」という問いと、「苦しいのですね」という問いを区別する中で培われていく人間の連帯を、達成されるべき一つの目標とみなすリベラル・ユートピアを提唱した。またそのように想像力をもって他の人間存在を「彼ら」というよりも、むしろ「われわれの一員」とみなすようになる過程は、理論ではなく、エスノグラフィー、ドラマ、小説といったもので描写され、描き直すことで培われるとした。

しかし、では理論ではなく物語を支持し、文芸作品による人間描写と描き直しによって想像力を促進すれば、リベラル・ユートピアに本当に近づくのかという疑問が出る。この疑問について、ローティが後期ハイデガーに対して行った批判と、そのような批判に対してハイデガー側の視点から考察することで、哲学史上におけるローティの位置づけと意義について、新たな展望が開けてくると思われる。

4.2 後期ハイデガー批判

ローティは、前期ハイデガーの思想をプラグマティズムの思想であると解釈する。しかしローティは、ハイデガーが前期に「哲学者は時と永遠を眺めるという考えや、世界を上から「限られた全体」として見たいという願望から脱しよう」と努めた[25]にも関わらず、後期ハイデガーは「自分の以前のプラグマティズムを「過去何世紀にもわたって称えられてきた、思索の最も執拗な敵である理性」に対する軽はずみな降伏であったと結論づけ」[26]、「ついには彼が「形而上学」と呼んだものの代替物として《思索》を発明せざるをえなくなった」[27]と批判した。特にハイデガーが後期において、言語を物象化し、心的な位置づけを試みていることに対し、形而上学から脱せられてい

ないとし、前期から後期に至るハイデッガーを「哀れな人間の見本」とまで評した。そしてローティは、このようなハイデガーの思想の限界を主張し、ハイデガーよりもデュエーイに対して思想の卓越性を付与した。

ここで、ローティによるハイデガーに対する否定的評価の内容をまとめていくと、概ね下記の三点に集約される。

- 一 前期ハイデガーは、伝統的形而上学への囚われを指摘したプラグマティズムであったが、後期になると形而上学を超えようとしたが、代替物として「思索」という概念を置いて形而上学へ逆戻りした。
- 二 後期ハイデガーは言語を神聖化し、言語を主語においた。
- 三 ハイデガーはテクノロジーや政治等の公的な部分での注釈者として執拗で、狭量であり、公的な部分を展望する上で役に立たない。

4.3 ハイデガーの視点から

上記のようなハイデガー批判について、ハイデガーの視点から考察してみる。前期ハイデガーは、真理とは「「存在者を一隠れたさまから引き出してきて、一その隠れなきありさま（被発見態）において見させること」なのである。」[28]とした。そして、真理性とは発見的であることとした上で、「現存在が本質上おのれの開示態を存在し、このように開示された現存在としてものごとを開示し発見するかぎり、現存在は本質上「真なるもの」である。現存在は「真理の内にある。」[29]とし、開示し発見する現存在を「真なるもの」とみなし、真理の内にあるとした。信念が実在の正確な表象であると各個人が考えることをも含めて、真理の内にあると考えた。従って、前期ハイデガーはプラトンからニーチェに至る伝統的形而上学の囚われを指摘したが、その前期ハイデガーの思想は、ローティがプラグマティズムとして定義する「真理の対応説の否定」や信念と表象の関係とは合致せず、上記否定的評価の一は成立しない。

ローティは政治や公的な部分での論の準備として「想像力」に基づいた「連帯」を主張したが、ハイデガーの近い思想として「良心」論を挙げることができる。ハイデガーは「良心」について、「われわれは良心を分析するためにその出発点として、この現象について見られるひとつの中性的な所見に注目する。それは良心はなんらかの仕方でもなにごとかをだれかに告げ知らせるものである、という事態である。良心は開示するものであり、それゆえに、現の存在を開示態として構成する実在論的諸現象の範囲内に属しているわけである」[30]とし、これまた実在論的な現象内にある良心の存在について論じている。また「良心は、世界=内=存在の無気味さのなかから関心が呼ぶ呼び声であり、現存在をひとつごとではない負い目ある存在可能へ呼び起こす呼びかけである。」[31]としている。

更に「良心」に続き、ハイデガーは人間同士の関係、即

ち社会について、「世界=内=存在が本質的に関心（Sorge）であるゆえに、これまでの分析においても、用具的なものにたずさわる存在を配慮（Besorgen）として、そして内世界的に出会う他の人々の共同現存在との共同存在を待遇（fürsorge）としてとらえることができたのである。」[32]としており、現存在として人間個人は本質的に関心であり、他の人間との共同存在を待遇として捉えている。この「関心」から「配慮」、そして人々の共同現存在との共同存在を「待遇」としてとらえている点について、これはローティが考える、他者を描写し、描く中で、想像力をもって他者の痛みに共感することで我々の一員と見做していくリベラル・ユートピアに繋がる捉え方の言語表現を変えたものと言えないだろうか。即ち、前期ハイデガーの思想がローティが言う「役に立たない」どころか、ローティの政治や社会等の公的な部分の展望に対する思想の核心そのものの構築に多大な影響を与えていると言えないだろうか。

また、後期ハイデガーの思想を追うと、確かにハイデガーは、「存在の家」である言葉の本質を、存在への対応に基いて思索することが重要であり、自分ではなく言語が語る状態にするべきとした。ローティは、この点を無責任で、人間ではなく言語を主語に置くことを、形而上学への逃避であり逆行であると受け止めた。然し、人間を存在との関係から捉えているハイデガーからすると、存在に眼を向けず、存在者だけを相手にする思考と態度が存在を忘却した形而上学であり、技術による「総かり立て体制」へとつながるものとなる。ハイデガーは、存在忘却の結果として「存在の真理」が思索されていないと考え、存在忘却を回避することによって、思索が「みずからを放棄して存在によって語りかけられ要求されるままの状態にして、まさにその存在の真理を発語しようとする」[33]とした。後期ハイデガーは「あらゆるものに先立って「存在している」ものは存在である。思索というものは、その存在の、人間の本質に対する関わりを、実らせ達成するのである。」[34]とする。つまり、ハイデガーの視点に立つと、現存在である人間、主語としての人間が、存在忘却をしないことによって、存在の家である言葉の本質が思索され、存在によって促されて言語が語られる、という主張になる。即ち、後期ハイデガーも、あくまで主語は人間側にあるとみなしていたとも解釈できる。またハイデガー後期の「思索」に関する思想は、ハイデガーが現代の「科学的-技術的世界」を誘導したとみなす西洋形而上学を終焉させ、whatではなくwhyを問い、存在忘却を避けていくことを示すために打ち出していったものであって、「形而上学を超えようとした」わけではないとも考えられる。更に後期ハイデガーは、その存在論や形而上学への立場を基に、政治思想についても、「どんな国家民族主義もみな、形而上学的には、人間学主義であり、そのようなものとして主観主義である。国家民族主義は、たんなる国際主義によっては克服されず、むしろ、ただ拡大されて、体系へと高められるだけである。」[38]と語っている。あらゆる国家国民主義につい

て反形而上学的解釈によってその主観性を突いており、20世紀後半に広まる政治学における多元論に繋がりをうる考えとなっていることが窺える。このような言説も踏まえつつ、渡辺洋平が論文「政治哲学の再構成：多様性・対等性・非暴力を軸にして」で触れているように、ハンナ・アーレント、レオ・シュトラウスへの根源的なものへの問いの継承等を勘案しても、ハイデガーによる政治哲学の領域への貢献は、明示的でないものも含めて無視できるものではないであろう。

以上から、ローティによるハイデガー批判の言説は矛盾を孕んでおり、論拠が十分でない、と考察される。そしてそのような視点に立つと、ローティのネオプラグマティズムという思想の根源的な立場は、果たして道具主義的、経験主義的な古典的プラグマティズムと、現存在の企投性、存在、関心と言語による語りに着目するハイデガーの思想のどちらに近いのか、どちらの流れをより汲んでいるのかという問いが湧いてくる。更に、ハイデガーは「形而上学を超えようとした」とローティが主張するならば、ローティもまたハイデガーの革新的な思想観を表現を変えて引き継ぎながら、強い批判を展開して「ハイデガーを超えようとした」と見られる可能性も出てくる。

4.4 形而上学

ローティは、言語を人間が世界の实在を再現したり、または人間の心を表現したりする目的を持った媒体と見做すことを止め、偶然的にメタファーにより発展していくものとみなした。反实在論の立場を堅持しつつ、分析哲学の研究を経て言語に着目する中で、言語、芸術、科学、道徳の領域までもメタファーの歴史と見なしたことは、画期的であり、新たな哲学史観、思想史観を提供したと言える。確かにこの思想は、一見すると言語を主体とするようなハイデガーの言語観とは相容れなかったであろうが、ハイデガーが言語を主語として置いたのは、上述の様な複雑な存在論の思想体系の中から生まれ出た方向であり、言語を「神聖化」したと批判するのは飛躍とも言える。こうした観点に立つと、そもそもローティのプラグマティズム思想は、「大陸思想の影響を受けたプラグマティズム思想」ではなく、双方を融合した、さらには逆に大陸思想にプラグマティズムの要素が含まれた思想として見る事ができる可能性も出てくる。

また「公的な部分」についての批判についても、ローティは人間のアイロニーから生まれた文芸作品を通じて「残酷さ」を理解し、想像力を持って他者への「残酷さ」に気付いていくこと、共感していくことで、公的な部分も含めた人間の連帯が育まれていくのではと唱えたが、ではその想像力は如何にして生まれ、どのように全ての人間によって良い形で作用するのかについては言説が乏しいと考えられる。後期ハイデガーに対する「形而上学に逆戻りした」という言説を採用するならば、即ちローティもまた人間の想像力なるものに主導的な立場を譲り渡し、形而上学へと

逆戻りしたという主張も成立しかねない。

4.5 デューイの教育論

デューイはその思想展開の中で教育分野にも行き着き、民主主義の擁護にあたって、学校と市民社会の二つを根本要素とみなし、実験的な知性と多元性(plurality)の再構築が求められるとしている。デューイは、教育とは最も広い意味において、人間の生命を社会的に持続していく手段であり、社会自身の持つ機能に他ならないとし、有名な実験学校を運営したり、『学校と社会』(1899年)を著わしたりしている一方で、ローティは、デューイが非常に影響力を持った教育論の領域については殆ど言及していない。

そしてこの想像力の醸成と有効性の観点における教育論が不足している点は、ローティ自身の課題を検討する際の一つの端緒となると考える。ローティは想像力の醸成には小説に見られるような「物語の力」が重要であると説いたが、人々が小説を含む様々なメディアによる暴露的で赤裸々な残酷性へ触れる機会が増えたり、人々の文化的な表現能力が向上していったりするだけでは、ローティの言うリベラル・ユートピアの達成は難しいであろう。そこに読者、視聴者、交流者となる人間自身の体験と解釈のプロセスが介在する限り、原体験に基づく各個人の倫理観や教育によって培われる解釈に応じてリベラル・ユートピアに向かう場合と向かわない場合が生じてくるであろう。

ローティの著作と思想が、ローティ没後の今日において政治哲学の分野だけでなく、教育哲学の分野でも注目を集め、参照・研究されていることは、皮肉にもこのようなローティ自身の課題を示ししていると考えられる。ローティが示した、あらゆる偶然性と真理の不在を受け入れた上で、想像力の醸成による残酷さの最小化とリベラル・ユートピアを目指そうとする思想は、様々な分野で多大な影響力を持つ魅力的のものであったが、教育の分野においては、一体どのような教育を行うのが良いのか、という観点で研究活動の重要な研究の起点となっていたのである。

5. ネオプラグマティズムの展望と現代的意義

プラグマティズムを受け継ぎ、20世紀において大陸哲学やポストモダンの要素も取り入れながら形成されたネオプラグマティズムは、西洋哲学の伝統から徹底的に距離を取り、根源的な人間社会の理想的な在り方を問おうとしたものであった。これは超大国となっていくアメリカが、資本主義の拡張の中においても掲げ続ける民主主義の根源的で理想的な在り方、示し方を常に求められていた時期と重なる。ローティの思想が哲学界だけでなく、世界中の政治、社会、教育の分野で注目を集め、更なる研究活動が生まれたことを見れば、その意義は多大なものであったと言える。

一方、本論で考察したように、ローティ自身にも思想上の課題はあり、プラグマティズム、ネオプラグマティズムが発展途上にあることもまた確かである。『プラグマティ

ズムはどこから来て、どこに行くのか』(2020年)の著者ブランダムによると、ローティは、近代国民国家が生まれる端緒となり、民主主義の元となってきた第一の啓蒙思想「何をすべきか共に熟議し、決断する」からさらに進み、第二の啓蒙思想「何を言うべきか共に熟議し、決断する」を求めようになったとしている。ローティは表象モデルから離れ、ボキャブラリーの使用を道具的に捉える道具的プラグマティズムに至ったと見做される。そしてローティ以後、新たなプラグマティズムの立場も種々出てきており、ローティのような西洋哲学の伝統から徹底的に離れて人間の想像力によって立とうとする立場や、やはり有り得るべき規範を明示化したり、ドイツ観念論との連続を捉え直そうとしたりする立場に戻る動きも見られ、今後100年後にどのようなプラグマティズム思想が流れているかを想像することは難しい。しかし、その思想を追いかけ、その在り方を問い続け、ローティが主張するようにより良いものを提示し続けることは、世界市民にとって重要なことであろう。

6. 謝辞

様々な挑戦が重なる中、このような機会と指導を頂いた放送大学大学院人文学プログラム魚住教授と様々なアドバイスや示唆を与えて頂いた全ての皆様に感謝申し上げます。

7. 文献

- [1] リチャード・ローティ著『ローティ論集』, 富田恭彦編訳, 勁草書房, 2018年, 205頁
- [2] リチャード・ローティ著『哲学と自然の鏡』, 野家啓一監訳, 産業図書, 1993年, 29頁
- [3] 同上, 24頁
- [4] リチャード・ローティ著『ローティ論集』, 富田恭彦編訳, 勁草書房, 2018年, 219頁
- [5] リチャード・ローティ著『偶然性・アイロニー・連帯』, 斎藤純一・山岡龍一・大川正彦訳, 岩波書店, 2000年, 7頁
- [6] 同上, 228頁
- [7] リチャード・ローティ著『ローティ論集』, 富田恭彦編訳, 勁草書房, 2018年, 232頁
- [8] 渡辺洋平著「リチャード・ローティ --人間的, あまりに人間的な--」, 『あいだ/生成』第9巻所収, あいだ哲学会, 2019年, 20頁
- [9] リチャード・ローティ著『偶然性・アイロニー・連帯』, 斎藤純一・山岡龍一・大川正彦訳, 岩波書店, 2000年, 1頁
- [10] 同上, 3頁
- [11] 同上, 5頁
- [12] 同上, 154頁
- [13] 同上, 198頁
- [14] 同上, 189-190頁
- [15] 同上, 198頁
- [16] リチャード・ローティ著『ローティ論集』, 富田恭彦編訳, 勁草書房, 2018年, 16頁
- [17] 同上, 18頁
- [18] 同上, 170頁
- [19] 大賀祐樹『伝統的なプラグマティズムとローティのネオ・プラグマティズム』, ソシオサイエンス Vol.13, 2007年, 46頁
- [20] 大賀祐樹『希望の思想 プラグマティズム入門』, 筑摩書房, 2015年, 19頁
- [21] リチャード・ローティ著『ローティ論集』, 富田恭彦編訳, 勁草書房, 2018年, 222頁
- [22] 同上, 223頁
- [23] リチャード・ローティ著『リベラル・ユートピアという希望』, 須藤訓任, 渡辺啓真訳, 岩波書店, 2002年, 12頁
- [24] リチャード・ローティ著『偶然性・アイロニー・連帯』, 斎藤純一・山岡龍一・大川正彦訳, 岩波書店, 2000年, 5頁
- [25] リチャード・ローティ著『ローティ論集』, 富田恭彦編訳, 勁草書房, 2018年, 16頁
- [26] 同上, 17頁
- [27] 同上, 18頁
- [28] マルティン・ハイデッガー著『存在と時間 上』, 細谷貞雄訳, ちくま学芸文庫, 1994年, 455頁
- [29] 同上, 458頁
- [30] マルティン・ハイデッガー著『存在と時間 下』, 細谷貞雄訳, ちくま学芸文庫, 1994年, 101頁
- [31] 同上, 141頁
- [32] マルティン・ハイデッガー著『存在と時間 上』, 細谷貞雄訳, ちくま学芸文庫, 1994年, 406頁
- [33] マルティン・ハイデッガー著『「ヒューマニズム」について』, 渡邊二郎訳, ちくま学芸文庫, 2005年, 18頁
- [34] 同上, 17頁